— 座 談 会 —

「明治大学図書館と地域協力のありかた」

三枝 一雄* 浅古 清‡ 纐纈 公夫§
斎藤 哲 (司会)¶

*さいぐさ・かずお／図書館長／法学部教授／商法
‡あさこ・きよし／千代田区立千代田図書館長
§こうけつ・きみお／大屋書房社長
¶さいとう・あきら／図書館副館長／政治経済学部教授／ドイツ労働運動史

斎藤　本日は、お忙しいなかをお集まりいただきまして、ありがとうございます。

ただいまより「明治大学図書館と地域協力のありかた」ということで、千代田区立千代田図書館の浅古館長さん、大屋書房社長の纐纈さんにお出でいただきまして、座談会を開催いたしたいと思います。

この趣旨は、明治大学図書館というものが神田の地域に古くからありながら、これまで神田の地域と密接な協力関係をつくってきませんでした。しかし、これまでの明治大学図書館の発展を考えれば、ここの土地によって支えられてきた部分が非常に大きいわけでして、新しい図書館ができたことを機に、あらためてそういうものをつくり直していこうと考えました。そのためにどうしていったらいいかということで、みなさんからお知恵を拝借したい。そういう意味を込めて、本日の座談会を設定させていただきました。

1　新中央図書館の開館と地域協力

斎藤　まず初めに私どもの三枝館長より、明治大学図書館の特徴および地域協力に関する基本的な考えについて話していただきます。

三枝　明治大学図書館の三枝です。本学の図書館は来年 (2001 年) 3 月 16 日に中央図書館がオープンすることになりました。それを機に、大学図書館のあり方を、もう一度地域との関係で考え直したいということです。そこで、今回の企画をするにあたって特に考えた幾つかの点をお話しさせていただきたいのですけれども、特に「地域協力」ということをあえてこの時期にお話しするモメントとしては、私は 2 つのことがあったと思ってます。

一つは、うちの大学の生存基盤といいましょうか、存立基盤というものが、「都心型大学」という方向にあり、そ

こに、ある意味ではうちの基本線を据えなければならないという事情があるということ。もう一つは、周辺地域の公共図書館の存在。さらには最も大きな事情は、うちの大学の周辺に古書店街が存在するという事実。こういうことを抜きにしては、本学の図書館は語れないということもあって、それであえて本日、千代田図書館と大屋書房の纐纈さんにご出席いただいたわけです。

存立基盤としての都心型大学

三枝　そこで、第一の本学の生存基盤といいますか、存立基盤としての都心型大学ということについて若干お話しさせていただきます。

いま申し上げたとおり、本学としては、世界のなかでの大都市の一つである東京の、しかも、その中心の千代田区という都心にある大学としてのメリットを最大限生かしたいということです。都心型大学ということで言われていることは幾つかあると思いますが、まず第一に確認されるのは、地域的にどうしても狭隘にならざるを得ないということです。したがって、都心型大学の生きていく方向というのは、高機能化といいましょうか、付加価値を高めていくということ以外にはあり得ないということです。

それではつぎに、高機能なり高付加価値の方向として、どういうことが考えられるかということですが、私は、3つぐらいのことがあり得るのではないかと思っています。これも特に新しいことを申し上げるわけではありませんけれども、第一は、情報機能を充実していくということ。第二は、地域との協力関係を深めていくということ。第三は、いわゆる交通至便であるということのアクセスの容易さといいましょうか、それを最大限生かしていくこと。この3つぐらいが考えられると思っております。

第一に情報機能の充実の点ですが、見ていただいたと思いますけれども、新しい図書館のなかでそれに対応したものとして、マルチメディアコーナーを用意して、Web対応のパソコンを設置して、利用者が自由に電子化された学術情報にアクセスできる環境を用意する。そして、インターネットを利用して世界のデータベースにもアクセスできるようにしよう。これは今回の新しい図書館の中心でもあり、目玉でもあるわけです。そういう意味で、学生の、あるいは利用者の利用環境に対しての電子化に

よるメリットを最大限提供したいというのが、新図書館の目玉になっております。

その他、書籍の発注、受入、あるいは整理業務に関連しても、現在すでにコンピュータ処理が進んでおりますし、また書誌や所在情報のデータベース化に関連しては、OPACがすでに機能して、これをさらに広げていく。公開の方向ですね、これも現に進めております。

また学内の利用環境のなかでは、貸出、返却業務のコンピュータ処理も行っています。情報機能の充実ということでは、このリバティタワーそのものも、実は教育棟としてかなりその方面では充実してますけれども、図書館は、それより後につくられるわけですから、より充実したものに当然なっているということであると思います。

相互協力による連携

三枝　第二に、他の機関との連携という点ですが、これも実は、明治大学としては、先ほど申し上げたように狭隘な施設のなかで、図書収蔵能力にも限界があるとすると、当然収集資料を厳選せざるを得ないし、公立図書館も含めて他の関連機関と連携を深めていかざるを得ないということで、各種コンソーシアムというものをつくって、例えば収蔵資料について分担収集をしていくという方向を模索しています。

また、相互利用ということですが、私立大学図書館同士はもちろんのことですけれども、各種の公的な機関との間でも相互利用を深めていくことが必要だろうと考えております。この場合には公的機関だけではなくて、古書店との間でも情報交換はもちろん必要なことになってきますし、そういった意味での情報の相互利用ということでしょうか、そういうことも深めていかなければならないと考えています。

特にコンソーシアムについては、具体的に、明治大学としては、山の手沿線の８大学との間で相互利用を深めるためのコンソーシアムについての基本的な合意を今年やりまして、実施しているのですけれども、さらにもっと利用範囲を広げていく。単なる図書の閲覧だけではなく、貸出も簡単にできるようにということで、今進めております。

それから第三に、交通至便な地にあるということのメリットを最大限活

用しようという側面ですけれども、具体的には、各種イベントの開設とか、講座の開設ですね。すでに本年、古書店さんのご協力もいただいて公開講座という形で「古書の世界」というものを連続5回ぐらいやって、大変好評を得たということもありまして、これについてはさらにまた進めていきたいと思っております。

うちの大学と違って、郊外に行かれた大学もかなりありますけれども、結局また都心に若干の機能を回帰せざるを得ない状況にあることを見ても分かるように、やはり都心にあるということは、非常に有用なことだと思ってます。

また、時間帯の活用という点でも、やはり近いところというのは便利で、夜間の時間帯の活用も可能です。よその大学あたりでも、駅前に出張講座を設けたりということをしていますけれども、うちはある意味では駅前ですから、あえてそういうことをしなくても、この施設を利用して使えるということで、そういう方面で活路を見いだしていく。こういう方向を探っていけるということが、都心型大学の強みでもあると思っております。そういう観点から、特に都心型大学という方向で、我々としては考えざるを得ないということです。

図書の宝庫である古書店街

三枝　もう一つ大事な要素として強調しておきたいのは、神田の古書店街の存在ということです。私自身も学生時代にはずいぶん古本屋街を歩いてまわって、その背表紙を見て、それなりのいろいろな意味での印象を受けて、刺激を受けています。図書館にない本を見つけたということも、もちろんありましたし、しかも安く手に入るというメリットも受けております。これは単に大学だけでなくて、そういうメリットはみんな享受しているわけです。そういう意味でも神田古書店街の存在というものは非常に大きな意味を持っている。ある意味では、明治大学の側からすれば、神田古書店街は事実上の図書館みたいな役割を果してくれている。しかも、ほかに例を見ないくらい規模が大きいということで、これは東京全体の誇れる存在であろうと思うので、それがさらに本学と一体となって下さるということになれば、なおのこと本学の図書館の存在理由も高まるのではない

か、というようなことを常日頃思っているわけです。

私たちが「地域協力」というとき、特にここで考えるのは、都心型大学という方向が本学の基本的な方向であるということ、もう一つは、神田古書店街という伝統ある図書の宝庫といいましょうか、そういうものが存在していること。この2点にあると思います。

地域協力の現状

三枝　そこで、地域協力ということを進めていく場合に、従来どんな努力をしてきたのかということを若干振り返ってみたいのですけれども、結論だけ先に言ってしまいますと、十分でなかったと言わざるを得ないと思っております。

地域の公共図書館との連携ということになると当然、千代田図書館さんとの協力関係ということになると思いますけれども、これも今までのところでは、もちろん全く関係がないわけではなくて、従来から紹介状によって本学の図書館の利用を認めるということはすでに行っているわけですけれども、今のところはそれに止まっていて、それ以上には進んでいないという状況にあります。しかも、特にOPACでのオンラインを通じた書誌情報、所在情報の相互提携というのは今のところできていません。情報化社会としての図書館としては、そういう方向を探らざるを得ないということが起こってくると思います。そういう意味では、まだその点が進んでいないかなという感じは受けてます。

それから神田地域との協力関係ですけれども、大学全体との中では全くないわけではありませんで、明大通り懇話会というものが過去につくられていたとか、あるいは小川町西町会との話し合いというものも持たれてはいますけれども、これはA地区の建物を建てるときの建設についての合意形成といいましょうか、意思疎通を図るという趣旨のものであって、必ずしも図書館との協力関係というものについては、これまで特別なものはなかったと聞いております。

もちろん従来から古書店さんとは取引があって、それに必要な限りでの情報はいただいておりますし、過去には、いい本を見つけたときには率先して明治大学に先にご連絡いただけるというふうなこともあったやに聞い

ております。現在はそのところもだんだん薄れてしまってきているということで、その点でも残念な気がしているわけです。

そこで今回は、地域との協力関係のあり方をもう一回見直す必要性があるということで、その第一歩として、地域の図書館としての千代田図書館のご意見や神田古書店さんのご意見をお聞きしたいということで、今日お集まりいただいたわけです。

本学の図書館としても幾つかの事柄を考えておりますので、お2人からお話を伺ったうえで、また具体的なものはお話ができるかと思いますけれども、いま申し上げたようなことで、明治大学の図書館を中心に地域との間での協力関係として、どういうものができるかということの提案をお話させていただくということにとどめておきたいと思います。

斎藤　いまのことで私どもの図書館の基本的な考えというものはお分かりいただけたかと思います。

そこで次に、お2人から、明治大学図書館についてどんなイメージをお持ちなのか、何でも結構ですのでお話しいただけたらと思います。千代田図書館の浅古館長さん、いかがでしょうか。

明治大学図書館について

浅古　本日は、こういう形でこういう会を開いていただきまして、ありがとうございます。

明治大学の図書館のイメージということでございますが、私も千代田区に20年ほど勤めておりまして、千代田区に20年間通わせていただいているなかで、いろいろな大学があるということは存じておったのですが、なかなか大学の中に入っていくということは、20年間仕事をして、あまりなかった。ただ、明治大学さんとは、地域協力とか、開かれた大学というようなお話が館長

さんのほうからもございましたけれども、今まで街づくりですとか、ここの地区計画等でご協力いただいております。また、教育委員会では、生涯学習のさまざまな講座にいろいろな専門の先生を派遣していただいて専門的な講座ができたり、また中小企業対策として経営の面で経済学の先生からお知恵を拝借したり、区の審議会等で専門分野でのお知恵を拝借するなどの機会もあって、こうした地域社会への貢献には感謝しております。一方、図書館については、それぞれ図書館の設立目的とか、図書館の利用者の層といいますか、大学は大学の学生および先生方がご利用するというようなことでありまして、大学の図書館とは、相当に深く専門的な研究をされている図書館というイメージを持っておりました。

今日、始まる前に図書館をご案内していただいて、いろいろお話を伺いますと、これからは一般への開放も視野に入れた、開かれた図書館ということで、公共図書館の千代田図書館としては、本当にありがたいことだと考えています。今まで、区立図書館以外の図書館、大学図書館も含めてですが、協力関係をつくるということは、けっこう難しいということがございました。

今、公立図書館につきましては、23区、市町村、東京都、国会図書館を含めまして協力関係ができておりまして、国会図書館、都立図書館につきましてはインターネットでもつながっておりまして、検索もできるという状況になっております。しかしながら、何分にも利用者のなかで専門的な研究をされる方には、公共図書館では、ちょっと専門的な部分で弱いということもございまして、大学の専門的なところをお借りできると、図書館としての利用者に対するサービスが広がるのではないかと考えております。

斎藤　それでは、続きまして大屋書房の纐纈さんにお願いいたします。

纐纈　あまり身近すぎて、イメージというのがなかなか、ほかの方と違って鮮明に出てこないのですけど。私、明治の経営学部を出まして、佐々木先生だとか、土屋喬雄さんが学部長の時代でございます。ゼミは、亡くなられた北先生の公益企業をやっておりましたのですが、その時分は、先生と一緒に図書館を利用したことがあるだろうか。そのへんのところになると、残念ながら一緒に伺って勉強したということはないんですよね。現

実問題として、我々の時代の観念からいうと、できれば自分の手元に本を取り寄せて勉強する。そのへんのところが第一になって、千代田区の図書館なども利用させていただきましたけど、それこそ受験的な事柄の場所借り的な要素が多分に多うございました。ですから、そういう意味では、学生のときの明治大学の図書館というのは、やはり専門的なものというふうな概念がございましたので、比較的一般の勉強では入りにくかったというところが、まず第一でございます。

あとは仕事上、古書店ということでございますので、父などのつながりも見ておりまして、これは刑事博物館なども含めまして、どうしてもかなり専門的な分野の蔵書ということでございますから、大学におられる先生の研究機関というふうに、どうしても捉えがちでございました。

今まで拝見しました書き物などから、これからは博物館的な部分も含めた外部への内容のPRというのでしょうか、先ほども拝見させていただきましたけど、図書館の入口の左側に企画の展示室がございますけど、あれは最大限に私などの立場からPRの恰好の門戸ではないかと感じました。

斎藤　どうもありがとうございました。

2　公共図書館との協力関係

斎藤　それでは、以上のことを前置きとして、いよいよ本題のほうに入らせていただきたいと思います。

館長の話にもありましたけれども、明治大学図書館が地域に開かれていくためには、どうしても具体的な手掛かりが必要なわけです。その一つが公共図書館、とりわけ近くにある千代田区立図書館との協力関係をどうつくっていくか、ということかと思います。どのような形の協力が可能なのか、またどうしたらその協力関係ができるのか。

まず初めに、公共図書館、具体的には千代田区立千代田図書館の側から、大学図書館との関係について、どのようなことが一番望ましいと思われるのか。それを中心にお話しいただき、それに対して私どものほうも、随時意見を出させていただくという形でいきたいと思います。

千代田図書館の概要と特色

浅古　簡単に千代田図書館の概要でございますが、場所は千代田区九段南一丁目、千代田区役所の隣にございます。もともとは、大日本教育会附属書籍館という明治20年頃に設立されたのものが前身であったようですが、現在の千代田図書館になったのは、昭和30年です。昭和30年に千代田区の区庁舎ができまして、そのときに、区立駿河台図書館といって駿河台にあったものが現在地に移ってきました。それから、既に45年たっておりまして、建物も多少老朽化しております。

現在、区立の図書館は、千代田図書館を中央館としまして、四番町図書館が地域図書館として1館。それから、小学校の建て直しに伴いまして小学校の図書室を地域の皆さんに開放し、また小学校の図書館としても使っていこうということで“まちかど図書館”という形で2館。あとは神田和泉町にパークサイドプラザという建物。これも和泉小学校と併設でございますが、そこの図書室というのがございまして、それも地域に開放しまして、この5館が千代田区立の図書館として、現在オンラインネットワークで結んでおります。

千代田図書館の特色ということでございますが、利用者はお子さんからお年寄りまで。またジャンルも、幅広く普遍的になっています。公共図書館ということで、何分にもそういう広い利用者を考えております。

そのなかで他の公共図書館にない特徴としまして、一つは、内田文庫という文庫がございます。これは内田嘉吉さんというもともと神田駿河台周辺にお住まいになっていた方からご寄付をいただきまして1万7千冊。特に海洋書関係の専門書が多うございまして、それを所蔵をしておるということ。それから、古書店の経営者としては著名な、故反町茂雄さんが収集した古書目録を、これは古書のカタログというふうに私は理解しておるのですが、かなり貴重な資料でございまして、この古書目録の寄贈を受けま

して、それを2年間かけまして、整理をしたものを千代田図書館のほうで所蔵している。この2点につきましては、たぶん他の図書館のなかでも非常に、特に古書目録につきましては、全国の図書館のなかでも非常に貴重なというか、珍しい資料の所蔵だと思います。また、その古書目録によって、どの時代にどういうような本があったということも分かります。千代田図書館として誇れる特色でございます。

二松学舎大学との協力関係

斎藤　いまのお話で概要、特色が分かりましたけれども、明治大学図書館とどういう協力が可能かということに関して、私どものほうで改めてここで教えていただきたいのですが、千代田区立図書館と二松学舎大学との間に協力関係がありますね。「朝日新聞」に簡単な紹介がありましたけれども、二松学舎との協力関係というものが、どういう経緯で生れたのか、また協定内容がどういうものなのか、具体的にどの程度の利用があるのか、そのあたりを少しご説明いただけたら、私どもの参考になるかと思います。

浅古　新聞等でご存じのとおり、九段上にあります二松学舎大学と2000年の4月から相互協力ということで協力をいただいております。千代田区立の図書館は、利用者の住所に関係なく利用できますので、当然ながら二松学舎大学の教職員・学生につきましては、今までも千代田区立図書館を利用できました。一方区立図書館としましては、今回の相互協力により大学の専門的な資料を活用できるということでサービス向上になります。

二松学舎大学との協力関係は、区内の大学の担当の方と、教育委員会の生涯学習という関係のなかで、いろいろな話をしようということで年一回懇談会をしておりまして、それに図書館も参加しております。そのなか

で、図書館相互の協力関係がどうなんだろうかということで、大学側から出てきたと聞いております。区としては非常にありがたいことでありまして、いろいろな条件を詰めて、2000年2月に覚書を交換するに至ったということです。

現在、二松学舎大学の図書館を利用する条件としまして、まず千代田区民であること。満20歳以上であること。千代田区立図書館で登録していることの3つがあります。これまでは、明治大学もそうですけれども、区立図書館のほうから紹介状を出しまして、大学の図書館を利用させていただいていたという経緯があります。これが今は、3つの条件をそなえ、かつ、具体的な研究テーマがあれば、二松学舎大学の図書館へ直接行って、そこで利用者証を発行していただく。それについては、1年間その利用者証でその図書館が利用できる。利用の範囲は、当面館内での閲覧だけですが、それでも千代田区としましては、一歩前進ということで喜んでおります。

そして実績ですが、4月から初めまして現在まで3名の方が利用者証を発行されたということです。その3名の方につきましては、専門に研究をされている方とか、そういう方でございます。二松学舎大学ともいろいろご相談をさせていただきたいと思うのですが、これで1年間実績を見まして、もうちょっと使いやすい方法も考えていく必要があると思っています。

一番の問題点は、大学の図書館にどのような本があるか分からないということです。例えば慶應大学と藤沢の図書館との相互協力ですと慶應大学の目録が検索できるとか、そういうような形で、本の所蔵でも分かれば、もっともっと利用が増えるのではないかと考えおります。

斎藤　生涯学習に関連する懇談会で協力についての話が出てきて、それから覚書を2月に締結されるまでの間、時間はどのぐらいかかったのですか。

浅古　1年ぐらいです。

斎藤　二松学舎大学との協力関係というのは、私どもにとって大変参考になるわけですけれども、千代田図書館のほうから、所蔵情報の公開ということが既に出されましたけれども、明治大学との間に仮に協力関係を結んでいこうという場合に、どういうようなことをそちらから要望として出していただけますでしょうか。

大学の専門性を公共図書館に

浅古　千代田区のほうからお願いすることがたぶん多いと思うのです。明治大学からこういうようなお話をいただいて大変ありがたいと思います。公共図書館ですから、特定の人々を優先的に利用させるようなスタイルは得意ではありません。明治大学の教職員や学生さんの個人利用に関しては、今までと同様の利用パターンになります。千代田区の図書館資料の利用や、時には大屋書房の社長さんが言われたように、勉強のために使うようなこともあると思います。

地域資料でしたら、この地域、特に千代田区の歴史資料ですとか、そういうものについては、相当程度所蔵はしております。大部分は禁帯出扱いなのですが、大学図書館への貸出は可能かと思っています。

大学側へは、先ほども申しましたように、大学の専門性を公共図書館に少しご協力をいただけないだろうかと考えています。また、現在「生涯学習」のほうでは、いろいろな講座でお知恵を拝借しておるわけですが、千代田区立の図書館でレファレンス等で相談があった場合に、明治大学でこのような資料を持っているとか、知識をもっているとか、ノウハウがあるとか、そういうものがご紹介できれば、より区立図書館としても利用者サービスの向上になるのではないかと考えております。具体的に細かい点についてはお願いする点が多々あると思いますが、一番の点としましては、そのへんだと思います。

斎藤　館長、明治大学のほうから、だいたいこういうことだったら無理なく提供できそうだというような、公開できそうだということがありましたら。

OPAC、相互貸借など相互協力の可能性

三枝　今まで十分に検討しているわけではありませんけれども、基本的には、先ほどもお話したように、明治大学の蔵書の書誌情報と所蔵情報、こういうものは既に公開しているのですけど、それの相互交流を深めるということが、差し当たっては実現しやすいし、成果も大きいのではないかと思います。ただ、それを具体的に進めるに当たって、OPACを利用できる

だけのシステムの構築ですね。これが千代田図書館のほうでご検討いただけるかどうかという問題は残ると思いますけれども、そのへんさえクリアすれば、進められるのではないかと思っています。

斎藤　もう少し細かい点では、相互貸借とかは可能なわけですか。

浅古　それは可能ですね。

斎藤　現在、大学図書館同士ではあるわけですけど、それを公共図書館まで広げるかどうかというのは、私どものほうの問題になりますが。

三枝　もう一つ補足したいのですが、うちの場合は、もちろん基本的な方向としては、最終的には「開かれた大学」ということですから、区民に限定せずに、本来であれば利用したいという人には全て公開したいというのが本来なんですが、先ほど都心型大学と申し上げましたように非常に狭隘であるわけです。閲覧スペースとか、そういうところが狭隘であるものですから、全部公開しますと、うちの場合は、ご承知のとおり予備校も多数ありまして、予備校の学生によってスペースが占められ、正規の学生が利用できないという状況が過去にあったわけです。それで入口にゲートを設けたりして、そういう方の利用は遠慮願っているという状況もあるわけです。公共図書館の場合は、もちろんそういう方もいっぱいいらっしゃるわけですね。そういう方が結果的に千代田図書館を通して、具体的に言うと予備校生の人たちが、来ることは避けねばならないと考えています。ですから、利用していただく場合についても、研究テーマを書いてもらうとか、うちのほうからも若干要望が出るかもしれません。これは私立大学の宿命ですので、ちょっとご承知おきいただければと思います。

斎藤　もちろん実際に提携関係をつくっていくとなりますと詰めなければならない問題がたくさんありますけれども、一番大きな問題は、おそらくOPACの公開をどういう形でやっていくかということだと思います。その他、通常の図書館相互貸借であるとか、コピーサービスとかというのは、それほど問題はないと思います。

三枝　千代田図書館のほうで、電子化に対応して何か具体的に進めていることがありますでしょうか。または設備としてどの程度のものを備えておいででしょうか。

浅古　今、千代田区の図書館５館がネットワークでつながっておりまして、所蔵情報、書誌情報はどの館でも検索できるようになっております。但し、明治大学さんとつなぐとなりますと、専用回線で対応しなければいけませんので、その辺がまたネックになると思います。今後、インターネットで情報公開できるようになれば、専用回線の点はクリアできると思いますが、現状はまだそこまで行っていないということです。

斎藤　私どものほうは、明治大学図書館のホームページに入っていただければすぐにOPACのほうに移れます。従って、千代田区立図書館さんのほうに利用者がインターネットでアクセスできる条件さえあれば、私どものほうとしては問題ないわけです。

浅古　その件に関しましては、今いろいろ図書館でも検討しておりまして、来年もしくは再来年ぐらいまでには、インターネットで自宅で検索をする。その先、例えば予約とか貸出までできるようにするのかどうかということは検討中です。要望としては、そういう要望もございますし、またご存じかも知れませんが来年４月からは、2〜3の区ではそういうようなシステムを稼働するということも言われてますので、千代田区としてもそれは必要だなという意識は持っています。今の財政上の問題ですとか、そのへんでどこまで進めるのかなというのは課題になっています。

斎藤　二松学舎の場合でも、所蔵状況がはっきり把握できないというお話でしたけど、例えば慶應の藤沢の場合ですと専用回線でやっているわけです。これもまたお金がかかるわけです。そのあたりが一つのネックになろうかという気がしますけど、そこがクリアできれば、非常に使いやすい状況が生まれてくるかと思います。

　話を少し変えまして纐纈さんにお話しいただきたいと思うのですけど、いま話しておりますような公共図書館と大学図書館との協力関係というのは、地域の書店の側から見ていきますと、そこにどういう魅力といいますか、あるいは必要性というものをお感じでしょうか。

古書店からみた図書館の協力関係

纐纈　図書館というシステムのなかで、我々から見ていると、公共図書館も私立大学の図書館も全てあくまでも図書館機能を具備したものというふうに解釈しておりますので、これはネットワークで結ばれていることが非常に便利だと思うのです。

千葉県などの博物館でも、最初は乱立しましたけど、そのあと中央博物館で全部資料の所在を確認できるようなシステムにしたということを、今から10年ぐらい前でしょうか、それも含めまして、例えば東京都の都立公文書館都政資料館がございますが、そういうようなものも含めまして、資料の重複が相当数各図書館にございます。結局、厚みのあるところと薄いところがございますので、そのへんの特徴を我々もぜひ把握したいし、なおかつそういう事柄を皆さんが知るうえでは、この図書館についてはどういう方面が充実しているというような事柄が即刻わかるわけですから、ぜひネットワークで結ばれたうえで、先ほどおっしゃられたシステム上問題がなければ所蔵情報の公開というんですか、そういうものが外に分かればありがたいと思います。

では、書店のほうはどうなんだというと、書店のほうの在庫管理に関してシステムをきちっとやるには、移動が激しいものですから、なかなか図書館みたいなわけにいかない部分があります。もちろん一部、目録をそういうものに流していろいろなところからお問い合わせをいただいているケースもございます。方向性としては、そういう方向に古書店もかなり向いているのですけれども、全般から見ると、まだ特に発達しているようには思えません。

至近な例で申しますと、私どもへ今、現在もしくは10年前に出版されたようなものが、当店では取り扱っていないジャンルでも、知っている方からお電話をちょうだいして、パソコンで全国どこにこういうものがあるか調べてもらえないかというようなケースもあり、うちの娘などは盛んにやって、答えを出してお送りしているケースがございます。今のところ、そういう事柄はサービスぐらいの点で、営業とは直接そんなに大きくつながりませんけれども、利用はしております。

OPACの公開

纐纈　先ほどのお話のように、図書館が全部つながってくだされば、これはもう本当にありがたいことですし、お客様への紹介なども非常にスムーズでありがたいことだと思うのです。

例えば、明治大学で所蔵している「蘆田コレクション」(あの地図の非常にいいコレクション)を、私がこちらにあるのを存じ上げたのは、刑事博物館で展示をしたときが初めてなんです。あれだけのものが奥村司書長の時代に入手されたようですが、近くにいて、また関係する本屋でありながら、存じ上げなかったというのが、今までの状況だったんです。

これからは、どんどんそれこそテレホンカードにもお作りになられたようですし、ああいうようなことも含めまして、大いにシステムも含んだPRを、どういう形ででも検索して、こちらの状況が分かるような形がとれるようになれば大変ありがたいと思います。

あとでお話したほうがいいかもしれませんが、電子図書館についての映像で見るというものについては、ある程度基礎を身につけた方は、原本が分かった上でのご利用ですから、大変いいと思うのですけれども、未熟な方が、あそこから本とか資料を見て、こういうものだという知識を自分で持つようになると、かなり変形した知識の形になると思うのです。

例えば、この机というものを知ったうえで、チークの机だとか、いろんな机があるというのが分かるのを、映像で見るのは、これは非常にいいと思うのですけど、机本体を知らないうえで、映像だけで文字の知識だけを頭にたたき込むと、かなり変形したものになりやしないか。そのへんが、いろんな利用の仕方がございますけれども、電子図書館で図書を見るということに対する危惧というのは、かなり大きいものだと思いますので、そのへんのところは御留意いただいてお進めいただけたら、大変ありがたいなと思います。

斎藤　ただいまのお話には、幾つかポイントがあると思うのですけど、一つは、大学図書館に限らず、公共図書館も含めて、図書館にどういうものがあるかということを知らしめること。その方策をしっかり打ち立てるということだと思うのです。もう一つは、図書館の所蔵資料をどのように公

開するかということで、これには例えば図書館のサービス機能の一つとして、電子化されているものの見方、それを公開講座なら公開講座で知らせていくというやり方もありますし、現物を展示するというやり方もありますし、さまざまあると思います。そのあたりを工夫せよと、そういうお話だったかと思います。

公共図書館との協力関係ということで、ここで明治大学図書館の側から、今後具体的な展望としてどういうことができそうだということを、あらためてまとめて少し。

協力関係の構築に向けて

三枝　千代田図書館との協力関係の進め方ということについては、すでにお話したことと重なってしまうのですけれども、いまお話のように、相互にどういう図書をそれぞれ所蔵しているかということを、これは進める第一歩ですから、書誌、所蔵情報の相互利用ということは、早急に実現していく必要があると思うのです。OPAC の公開もその一つですけれども、これはうちのほうからももちろん提供しますし、千代田図書館のほうからも。しかも、これは一時的なものではなくて、継続的にできるシステムづくりということを、どうしてもせざるを得ない。先ほど私のほうで千代田図書館のほうの電子化の状況をお聞きしたのは、それもあってのことですけれども、相互にできるだけタイムリーに所蔵情報なり書誌情報を相互交換するというシステムづくりが、まず第一にしなければいけないことだと思います。

具体的に進めるとなると、予算上の問題とかいろいろあると思いますけど、できるところから一つずつ始めたい。千代田図書館のほうから情報ができなくても、こちらからだけでも提供できるような形でも、一方通行であっても、しばらくはかまわないと思いますけれども、最終的には双方向になることが望ましいと思うのです。そのために、ある程度具体的な作業が進められればいいと思っております。

あとは利用者を両方でどう調整していくか。先ほど申し上げたように、千代田図書館のほうは利用者範囲が非常に広いということがありますね。うちのほうは、どちらかというと学生とか研究者を中心にした図書館とい

うことで、若干利用層が違うところもありますけれども、オーバラップするところも出てくると思うのです。

利用の中身については、これも段階的に進めたほうがいいと思いますけれども、まずは閲覧を中心にして始めていって、最終的には相互の貸借というふうなところまで進んでもいいと思うのですけれども、その中間の過程で、コピーの利用を拡大するといいますか、これは著作権との問題もあるので一概にはいきませんけど、本そのものの移動は難しいとか、そういうこともあり得ると思うので、そういう場合にコピーの交換だけでも結構役に立つので、そういうものを使うということ。そういうことも含めて、相互の利用する範囲を、利用者の問題とか、利用する中身の情報の問題、全部いっぺんにではなくて、できる範囲で交換できないかなと思います。

先ほどもちょっと申し上げたように、うちのほうで8大学との間で利用に関連してコンソーシアムをつくって、主に利用を中心にしているのですけれども、そのなかでもいろんな意見がありまして、本の貸借についても、あらためて紹介状を持ってこいという大学もあるし、そのままで大学の共通カードでけっこうですよというところもあるし、それぞれの事情があるわけです。そこで若干のノウハウをこちらも持ち合わせていますので、そういうものも提供しながら話し合いを進めていくことは可能だと思いますので、具体的な詰めはさらに検討していく必要があると思うのですけど、一歩一歩進めたいということです。

斎藤　館長が言われましたように、できそうなところから進めていきたいということです。事務的な作業にできるだけ早い時期に入っていきたいと思います。

3　古書店との協力関係

斎藤　次に地域、特に古書店との協力関係ですね。本屋さんの町ですから、もちろん新刊書の本屋さんも含めてですが、本学図書館が本屋さんとどういう協力関係をつくっていったらいいかということを考えていきたいと思います。

私どもの図書館というのは、これまで基礎を築き上げていく過程で非常

に古本屋さんのお世話になったわけです。一応基礎が固まってまいりますと、専門図書館という方向へ進んでいく過程で、どうしても新しく出版される専門書をどんどん吸収しなければいけないということで、古書店よりもむしろ新刊書を扱う本屋さんとの取引のほうが増えてしまうというのが現状だと思うのです。しかし、ここへ来まして、特色あるコレクションを形成していくなかでは、新刊書だけを追いかけても特色あるコレクションができないわけでして、あらためて古書店との協力関係が重要になってくるわけです。これまでも古いものではいろいろと協力をしていいただいたわけです。最近でももちろん地方誌の収集とか、特色あるコレクションをつくる過程でお手伝いいただいているわけですが、それを発展させていくためにはどうしたらいいかということを、少し考えたいと思います。

ここで纐纈さんに、大屋書房と明大図書館との関係をお話いただきたいと思います。先ほど纐纈さんは明治大学のご出身であるし、いろいろな意味で明治大学との関係が非常に長く、また深いものだということをおっしゃっていましたが、本の納入というようなところに絞って、まずお話しいただきまして、そのあと実際に古書店と明治大学図書館との協力関係がどういうような形でできるかという話にもっていきたいと思います。

纐纈　私の知っている限りでは、法制史も含めまして、文部省の助成金がだいぶ出た時代がございますので。

斎藤　昭和40年代でございますね。

纐纈　そうでございましょうかね。島田先生が図書館長をやっていらっしゃった時期ぐらいが、特にそのへんが強力だったかと思いますけれども、その時分には、特に法制史関係のものが資料としては多く入っていると思います。

それこそ奥村司書長のときには、それなりに江戸期の文学系の書物を多数納入させていただいた経緯がございます。これは明治大学に専門的な先生がおられるときに、その部分の層が厚くなるというのが、今までの一般的な傾向でしょうか。私どもで今まで納めたなかで、例えば函館図書館などは、郷土史誌に興味を持つ館長がおられた時代に、アイヌ関係だとか、北海道資料が膨大に入ったりしております。どなたか研究をされるある程

度の知識量をお持ちの先生がおられる時代に、そういう関係のものが納入できるという事柄が多かったと思います。

ただ今後は、どちらかというと、重要なこういうものが出たのを「出たよ」というお話で情報をお持ちする。それが大学の図書館としてどのように過去の蔵書のなかとの結びつきで必要なのか。それにはどうしても私たちにも、事前に蔵書の傾向が認識としてあるにこしたことないわけです。

現在もちょっと持っておりますけれども、そういう結びつき。例えば文学部にしても、法学部にしても、経済学部にしましても、先生方のご熱意というのは、たぶんに影響があると思います。ですから、蔵書の形成のなかでは、図書館の方々の専門的な、要するにものの奥までということではなくて、本のバランス上の問題ですとか、専門化する蔵書を増やす場合の判断というのでしょうか、そういうようなものが、先ほどからおっしゃられている電子化されてくるいろんなものとある程度並行して認識をお持ちいただければいいと思うのです。ややもすると、全国の図書館のなかで、本なり資料をご判断いただける方が、残念ながら減少して、機械を扱えるノウハウをお持ちの方が、どちらかというと重要なポストに就く傾向がございますんですね。ですから、そのへんところを……。

ある大学ではある時期に、図書館のシステム化をしました弊害といたしまして、書誌学というものをやっていらっしゃる先生方の利用頻度がガタッと落ちてしまった。なぜかというと、最初の頃なものですから、それこそ年代と書名と形態だけを記録したわけです。そうすると、簡単に言いますと、新しいものが出てきたときに、それを打ち込みますと、同じものがもううちの図書館にはあるよといって、必要ないからとポンと蹴られちゃうわけです。現実には、本を比べてみますと違うんです。そういう書誌学などをやられている方々は、実際に違うものがあってしかるべきなんですけれども、それが出なくなるシステム上の問題というのが、一部弊害で出てきたりしておりました。ですから、ぜひそのへんのところの融合というのでしょうか、バランス上うまくやっていただければありがたいなと思います。

斎藤　ただいまのお話は、本を販売するというそれを超えた、図書館のあり方そのものに関わってくることであったかと思います。実際、私どもは、

大屋書房さんをはじめとするさまざまなところからいろいろなものを購入して蔵書をつくってきたわけで、これからよりそれを発展させていくためには、確かにこちらの情報をしっかり公開しておかないとだめだという部分があると思います。それは一番考えているところでありまして、その観点からも、OPAC の公開など、ホームページからの公開をやっているわけです。ある専門の人がいるから、これを売り込めばいいという、それだけで行ったのでは、纐纈さんもおっしゃられたように、発展していかないわけでして、より組織的なものにしていくことが大事だと思うのです。

ちょっと書誌の話が出ましたけれども、おそらく公共図書館との協力関係でも同じ問題が出てくると思うのですけれども、書物というのは「知」というものですけれども、それを保存し伝えていくには、さまざまな角度からの仕事があるわけです。それをどう協力しあっていくかということだと思うのです。

私どもはこれまで公開講座で古書店の方々に「古書の世界」ということでやっていただいたわけですけれども、そうしたものも含めて、いろいろ古書店との間で、あるいは一般書店との間で、協力していく方向性があるかと思うのですけれども、書誌の問題以外でも、纐纈さんの側から見て、書店の側から見た場合に、こういうことを大学図書館でやってもらえるとありがたいということがありましたら。

特色ある蔵書情報の公開

纐纈　専門というか、この部分に対してはここの大学に研究者を向けたら一番満足していただけるだろうというような特徴を、それぞれ私どもでつかむことが、お客様に対する、またこれから勉強する方々のお役に立てると思うのです。そういう知識というのは、我々としては、店頭で本を売るだけのことじゃない違った部分のサービスとして、各書店がある程度までは認識をしていく必要があろうと思います。

例えば、馬琴の『南総里見八犬伝』という本が明治大学にありますよ、それは日本でいろんなところにあるなかで何番目ぐらいの良質のものですよとか、こういう特徴があるますよとか、そういうような事柄。慶應大学に『四十二行聖書』がこういう形であって、こういう先生が特に担当し

てますよとか、そういうことも含めまして、どんどん情報を我々も流したい。流すには、その情報源として各大学の特徴のある蔵書の、先ほどからおっしゃられている事柄を認識として持っていたい。それは非常に大きいと思うのです。

もちろん私どもで、先ほどおっしゃられたように公開講座、例えば千代田区の生涯講座に私も伺わせていただいたことがありますけれども、それぞれの地域と各大学の図書館の特徴というのは、どんどん打ち出していただくのがよろしいと思うのです。

国会図書館は何となく全部持っているだろうと思うと、そんなこともないんでしてね。いろいろ内情を伺うと、それなりの方々がおられても、予算取りとかいろいろな問題があって難しい部分もあろうかと思いますけれども、千代田区の図書館は千代田区なりの内部の歴史については絶対的だよというような資料の部分と、それから区民の一般的なものと、両方をも兼務しながらやっていく図書館が、今後いちばん利用率が多くなるだろうと思いますし、価値が高いと思うのです。

斎藤　先ほど馬琴の話が出ましたけれども、これがいつの刷りのものかということになってくると、それを書誌情報の中に盛り込む必要が出てくるという場合、おそらく納入してくださった古書店のほうの協力がないと、個々の図書館だけではかなりきついのではないかと思うのです。そういう書誌情報の交換だとか何かというところが、協力関係のなかで、表に見えないですけれども、重要なところではないかという気がします。

その他に考えられるものとして、さっき電子化の話が出ましたけれども、古文書等の電子化というのが、どうしても必要になると思うのです。電子化されたものがどう見られてしまうのかというのは、またありますけれども、危険性の問題は別として、保存上から考えても、利用のためにも、電子化が必要だと思うのです。大学図書館などでよく古文書等の電子化を進めるわけですけれども、古書店がそういうことに協力していくという具体的な例はありますでしょうか。

纐纈　ある程度あると思います。ただ、文字を読むということになりますと、これはまたひとつ違った部分での専門的なものがあって、一つのものが読めたから全部読めるというわけに、あればかりはいきませんものです

から、それこそそういう関係の方々に私たちも専門的にお願いするようなケースも出てきますから、これはいろんな協力はあろうかと思います。書誌の問題だとか、文字を読む問題だとかいうのは、その時代によって、こういう系統ならば、こういう字型文書の文字については刑事博物館のどなたかがいいですよとか、相模博物館の館長のそれこそ神崎さんならお読みになれますから、ぜひお尋ねくださいとか、いろんなケースがあろうかと思うのです。そういうノウハウというのは、私どもある程度備えておりますので、ぜひご協力はいたしますし、なおかつ状況によっては、必ずしも図書館で所有しているものだけでなくて、それ以外にも、私どもで参考に自分の仕事上必要なレファレンス的に持っている個々の資料も、それこそ電子資料としてご協力することはやぶさかではないと思いますし、できると思います。

斎藤　いま話しておりました大学図書館と地域の書店、特にここの場合では古書店との協力関係ということで、公共図書館の側から見ていきますと、大学図書館と地域の古書店との交流というのは、全くの他人事ということになってしまうのでしょうか。それとも何か公共図書館としてそこに関われそうな余地があるとか、そういうことはどうでしょうか。

浅古　公共図書館としてそこにどういうような形で関われるかということは、すぐには思いつきませんが、公共図書館は当然に大学図書館とだけの連携ではなくて、現在いろいろな形で古書店さんの協力をいただいております。また、先ほどの古書目録に関しましても、古書業界にかなりご協力いただきました。古書目録を寄贈いただいたのですが、どのように活用していくか、整理の仕方も含めて悩みました。その時点で古書店さんにはいろいろなお知恵を借りまして、それでやっと整理が2年間かけてできました。歴史的な資料等に関しましては、またいろいろなご相談を申し上げるということで、ご協力をいただかなければ、公共図書館としても資料を生かせないというか、運営上いろいろな点で支障を来すということもあります。良好な関係を今後も維持していきたいと思います。

蔵書の個性化に向けての協力関係

三枝　いまのお話との関連もありますけれども、纐纈さんがおっしゃったこと、いずれも重要なことですが、一つは、図書館の館長さんにたまたま専門知識の方がいらっしゃると、その方面の図書が充実する傾向があるというのは、そのとおりだと思うのです。それ自体は決して悪いこととは思いませんけど、長い目で見て図書館全体ということになると、そういうものを専門家の方が仮にいらっしゃらなくても、ある程度充実できるようなことは、むしろ大学側として考えていかないといけないなという感じがしておりますので、これは反省点としてお伺いしておきたいと思います。

それから、情報ですね。データの入力の問題は、確かに気をつけないと、書名とか何かが同じであっても、中身の違うものをはねてしまうという危険性は、おっしゃるとおりあると思います。これはその都度ご指摘を、相互の情報交換をしていくなかで、情報の質の高度化ということは、まさに古書店さんなりの協力がなければできないので、それはぜひしていただきたいと思っております。

もう一つ、大学としてはできるだけ大学として有益と思われるような本を、いわゆる大学の個性を、特色を出せるような書籍を集めたいとかねがね考えているわけです。そのためにも古書店さんのほうからそういう関係の情報を知らせていただきたいということはあるわけです。その場合に、お話がありましたように、大学の図書館それぞれがどういうところに特色を置いているかという点についての情報が、逆に大学側から古書店さんのほうに行ってないと、その助言もいただけないということになると思うので、それは単に書誌情報の交換とか所蔵情報の交換にとどまらず、それぞれ大学のほうからは大学としての個性化というものを、こういう方面に求めているのだということをお伝えするような、そういう意味での情報の交換も必要だろうと思っております。そのへんをぜひご協力願えればと思っております。

もう一つは、情報以外での協力関係というのは、いま千代田図書館の館長さんからのお話のなかで出たところですが、書籍に関しての整理を含めて、大学図書館が全部持ち合わせているわけではもちろんありませんし、それぞれがそれぞれのノウハウをお持ちだと思うので、その方面での協力

もいただくということで、相互協力をすべきということですね。そういう意味で、情報以外の面でも相互に協力できることがあるのではないか。

もう一つ、少し細かいことになりますけれども、古書店さんとの関係でいえば、古書の展示会とか即売会を、うちの新図書館ができますので、そういう施設を利用した形でのものを何かできるようなものがあれば、それもよろしいかと思いますし、またあるいは公開講座等の開設は、リバティアカデミーでやっていますけれども、それと併せて、場合によっては図書館の行事のなかにそういうものも組み込んでいただいて展開をしていくということも考えられるのではないかと思ってますけれども、これはさらにご検討いただいてというふうに思っております。

4　地域ネットワークの形成

斎藤　館長の話にもありましたように、幾つか具体的な方向が見えるのではないかなと思います。最後に、その具体的な方向をもう少し発展させる意味でも、公共図書館、古書店、大学図書館、この三者の連携ですね。あまり事務的なことというより、もう少し大きい展望というようなことで、どういうふうにネットワークをつくっていくのか。それを千代田区というこの場所のなかで、どうこの地域の人たちにアピールしていくのかというようなことで、それぞれのお考えをお話しいただけたらと思います。千代田区立図書館からお願いできますか。

浅古　いまいろいろお話しいただきまして、電子上のネットワークというのは、一つには、システムと予算が可能であればできるかと思うのですが、デジタルではなくて、もっとアナログ的というか、このように一堂に会して、そういうお話をいただくというようなところにも、何か出てくるのではないかなと思うのです。先ほど纐纈さんがおっしゃられましたように、電子上ですと同じ名前でも、実際には違うと。そういうようなことで、各行政と大学と古書店さんとが会って話をするということも非常に有意義であって、そのなかからまた新しいものが生まれてくるのかな。事務的に進んでいくと、本来ここでお話されたのと違う方向に行くこともあるかと思うのです。それぞれ担当同士で話して事務的に詰めていくと、そういう点

もありますので、懇談というか、それも必要ではないのかなと考えております。

斎藤　纐纈さん、お願いいたします。

纐纈　もちろんご利用いただくのは千代田区という地域、これは本屋もそれぞれ専門化しております。それから増えてもおります。そういう一極にだんだん集中の度合いがここのところ増えておりますので、そういうことも含めまして、区立図書館、千代田区なども、私どももずいぶん働きかけというか、全体的な意味で働きかけをいたしておりますけれども、ご利用しやすいような、画面でいけば、やはりそれぞれ自分のものについてまずアピールができるようなシステムをつくる。全体として神田の古書店街というものに対しては、相当いろいろなシステムでご案内はさせていただいているつもりではおりますけれども、まだまだ視点を変えないと不足している部分がたぶんあるのではないかと思うのです。ややもするとちょっと閉鎖的なんじゃないかと言われるケースもございますけれども、決してそんなことございませんで、大いにご利用いただければありがたいと思うのですけれども、利用していただくとっかかりというか、そういうところは、先ほどもおっしゃられたように、いろんな交流する会議みたいなものもごく簡単にお開きいただければ、なお一層発展するような状況ではないかと思います。

斎藤　館長、最後に大学側からいかがでしょうか。

三枝　いまお2人の方がおっしゃったこととほとんど同じことですけれども、もう少し抽象的な言い方をすれば、神田といいますか、この地区自体を東京のなかの文化の中心的な地域として発展させていく。そのためには、明治大学の図書館もその中心の一つとしてありたいということを願っているわけで、そのための地域間協力を進めていきたいということでやっていきたいと思っております。

　そのためには、いま千代田図書館長さんも、纐纈さんもおっしゃたように、時間のとれる限り相互にそれぞれの状況の意見交換の場を設定していくというのも、一つの方法だろうと思いますので、ぜひその機会にはご協力をお願いしたいと思います。

斎藤　私どもで予定しました話の内容はこれで終わりになると思います。最後に館長が言われましたように、私どもがこれから千代田区のなかで生きていくためには、公共図書館、古書店等々のご協力がないとやっていけないわけでして、私どもの持っているものをできるだけ外に開いていく。それがご協力いただくための前提となるわけでして、今日のこの会がその第一歩になっていけばと思っております。

長時間ありがとうございました。

――了――